
風の中で

昆兎獲流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の中で

【Nコード】

N1380X

【作者名】

昆兎獲流

【あらすじ】

突然すべてを奪われた男が、暗殺者にされ人生を翻弄される。奪われた記憶、過去を取戻し帰るべき場所を目指し、男の戦いが始まる。

それを阻む、二つの組織、そしてDST（国土監視局）それらの裏側でもつれ合つさまざま思惑。

風と共に時は流れ、思いはつなぎとめることができるのか・・・。

鎌風

- 起点 -

- 200X年 -

フランス北部

厳冬のフランス、冷たく研ぎ澄まされた空気が肌に突き刺さる。

風は空を裂き、岩をも砕かんばかりの波が高くそびえたつ崖にぶち当たり白波となり宙を舞う。

その島を取り巻く潮の流れは何人をも拒絶し、侵入を阻んでいた。それ故に、この島は無人であると信じられてきた。

そんな島の、そんな危険な崖の下、打ちつける波の中から一人影が立ち上がる。

その男、どうやって？何のため？ここに現れたのか？

足元を波が洗う岩場の上で、全身黒づくめのその男は、じっとその崖の上を見つめている。

その視線の先にはなにがあるのか……。

ゆっくりと男は、目前にそびえたつ壁のような崖に手をかけると、一寸の躊躇もなく登り始めた。

太陽が西の海に沈み、海原の上に漂う淡いオレンジ色の層の上に淡い紺色から闇へと繋がるグラデーシヨンの空が空間を覆い尽くそうとする頃、その崖の上に、その男が姿を現した。

枯れかかった草原の上で、大の字になって男は、紺から闇へと移りゆく空を眺めている。

ゆっくりと呼吸を整え、瞳を閉じた。

静かにそして確実に時は流れ、流れゆく風が枯れかかった草原をかサカサと音を立てて撫で上げる。

空はすっかり闇に包まれ、雲の隙間からは星の光が覗いている。闇がこの世のすべてを支配していた。

男は音もなく立ち上がり、草原の彼方に見える館を見ていた。文明の光が宿るその館、それは館というよりは城であった。

その城の周りは何もない、堀も城壁もない・・・ただの城がぽつんと建っている。それはまるで、どうぞご自由にお入りください、と言わんばかりである。

男も、それでは遠慮なく、とばかりにまっすぐにその光に向かって歩き始める。

振り返ることも、あたりを見回すこともなく、男の瞳はその光だけを見つめて、止まることなく流れるように進んでゆく。

ためらいも、おそれも、また感情もない・・・ただ進んで行く。そして、男は城の正面に姿を現すが、その歩みは止まることも、躊躇することも知らないらしい。

巨大な玄関を、気軽に音もなく開き、男は城の中へと姿を消し、そして再びその扉は音もなく閉じられた。

広い玄関ホール、その両側から半円を描くように二階へと続く幅3メートルほどのカーペット張りの階段があり、その下をくぐるように真っ直ぐと廊下が延びている。

男は、わき目を振らずにまっすぐと進む、そして巨大な扉の前に立つ、その巨木の一枚板から削り出されたその扉には、2匹の龍が絡み合うように天へと昇るレリーフが刻み込まれている。そしてその龍を取り巻くように、異形の生物が飛び交っている。

その見上げるほどの巨大な扉を、こともなげに開き、そのわずかな隙間から姿を消した。

そして、扉は音もなく閉じた。

空には暗黒が立ち込め、湿った空気が息苦しい。

辺りは、血と汗、鉄、火薬などのむせるような臭いが充満し、大

気は怒りに満ちていた。

男達は、思い思いの甲冑に、さまざまな形の楯、さまざまな武器を手に、雄叫びを上げ目前の敵へと襲い掛かる。

血がたぎり、血に狂い、血を求めぬ。

大地は血に染まり、大気に狂気が乱舞する。

誰も止まらない、止めることはできなかつた。

いつの時代のものなのか、その巨大なタペストリーは壁紙のようにその場に存在するのが当たり前のようにあつた。

芸術というには、あまりにリアル、凄惨、醜悪な絵柄である。

すぐれた作品ではあるが、美術館に飾るにははばかる代物である。

そんな作品を、巨大なシャンデリアに並ぶ何百もの蠟燭が、闇から照らし出している。

日本家屋が一軒丸々入ってしまいそうなその部屋の隅、大きな暖炉が赤々と光を放っている。

何十本もの太い槓が、赤い炎に包まれて、時折パチンと悲しそうに悲鳴を上げる。

その暖炉のそばに据えられた大きな一脚の玉座のような巨大な椅子。
子。

男の視線は、その椅子の背もたれの向こう側に注がれている。

大きな背もたれのため、どんな人物が坐しているのか全く見ることができない。

その漆黒の瞳、短く切りそろえられた黒髪、その男は日本人のようだ。

身長もさほど高くなく、どちらかといえば小柄な部類に入る。

しかしながら、アスリートが身に纏うようなピッチリとしたボデ

イースーツに包まれた、鍛え上げられ引き締まった体であった。

その男が、じっと見つめる玉座のような巨大な椅子が、この毛足の長いラグの上で信じられない動きを見せる。

大人2人がかりで運ばなければならぬようなその椅子、それがフツと十数センチ浮かんだと思ったら、その場でこちらにくるりと向いたのだ。

その椅子に坐している男、その存在は恐怖であった。有史以来の暗殺集団プリスカ一族を50年以上も束ね続けている化け物のような男であり、生きながらに伝説となった唯一の存在、コレット・プリスカである。

情報が真実だとすれば、齢すでに80歳は過ぎているはずであるが・・・目前に悠々と腰かける男は、まだ初老50代後半から60代初めのようにしか見えない。

長く伸ばした白髪を彩り鮮やかな組紐で無造作にまとめ、肩から胸のあたりにたらし、目じりの皺が彼の重ねてきた年月をあらわしてはいるが、その瞳に宿る光は一向に衰えてはいなかった。

座ってはいるが、非常に小柄と言ってよいであろう。身長は160センチ満たないであろう。体つきも細身で、見た目は小柄なおじいちゃんである。

しかしながら、その肌の艶、張り美容整形でも行ったのかと疑いたくなる。

「なにか、ようか？」

孫に話しかけるような優しい声音で、コレットが言った。

黒髪の男は、黙ったままそこに突っ立っている。しかし、その瞳はずっとコレットを捉えたまま動くことはない。

「お前、ヴェントであろう。」

男の瞼がピクリと反応する。

それを見て、コレットは満足そうにうなづいた。

「そろそろやってくるだろうと待っていた・・・、あまり年寄りを持たせるな、老い先短いであ、年寄りには時間は貴重なものじゃて・・・」

コレットはゆっくりとまるでスローモーションのように立ち上がると、両手を腰の後ろに組んでヒヨコヒヨコと3歩歩いて、じつくりとヴェントの顔を眺めた。

「なかなかいい男じゃの・・・まあ、わしの若いころの方が何枚も上手じゃが、ふむ、いい目をしておる。」

ヴェントと呼ばれた男の瞳が冷たく燃える、殺気が青い炎となり立ち上がる。

「むだ話は必要ないようじゃな・・・」

そう言つと、コレットの眼は細く鋭くとがり、軽く重心を落とす。両の手はだらりと下げられたまま、好きにかかってこいとばかりに自信に満ちている。

間髪入れず、ヴェントの体が沈んだ・・・弾けた。その体は水面の上を飛ぶトビウオのごとく一直線にコレットに襲い掛かる。

いつしか右手に握られていたナイフが、さつきまでコレットが座っていたはずの椅子の背もたれに突き刺さる。

ヴェントの右足が空を裂く。体を捻りながら打ち出した渾身の右回し蹴りを、コレットはフワリと風船のような動きでよける。

ナイフを抜き取るうとするヴェントの耳元で声がする。

「お前がそつなのか？」

「??？」

背後の声に向かって右肘が飛ぶ。手ごたえが全くなく、振り向くと真後ろにいてと思っていたコレットは、ヴェントから5、6メートル離れたところで、右手に燃え盛る松明を持ってゆったりと立っていた。

目を細めてヴェントの顔をまじまじと見つめる。

生きながらに伝説となった殺人集団の長、もう一人は今の時代暗殺者の中で最も恐れられ、情報を一切もらさずに頂点に立とうとする漢。

ヴェントがコレットを倒した時初めて名実ともに頂点を極めたことになるのだ。

二人の間にはただならぬ空気が大流となり渦巻き、コレットの手握られた松明の炎も尋常ではないほど燃え上っている。

「ほう、アジア系の顔つきじゃな、東南アジアにしては色が白い、日本人か？」

唸るように言ったコレットの言葉にも全く反応せず、ひたすら無表情のままコレットを見つめるヴェント。

「つまらん奴じゃの、お前が何も言わなんたらボケ老人の独り言みたいじゃわ、何か言ってみるか！」

孫の相手をする老人のような表情を見せ言う。

ヴェント無表情を保ってはいるが、コレットが一体何を考えているのか分からず、心の中は苛立っていた。額からにじみ出た汗がヴェントの頬を伝う。

「そうか、何も言わんか・・・仕方がないの、ちよつとばかり相手をしてやるっ」

そういうと、左手に松明を持ち替え右手を拝むように突出し軽く腰を落として構えた。対するヴェントは突っ立ったまま全くの自然体である。コレットはジツとヴェントを見つめたまま、左手がスーッと下がり、見つめあう二人のちょうど真ん中に向かって松明が宙を舞った。

火の粉を散らしながら松明は弧を描いて二人の視線を遮りながら床に落ち、小さな炎を散らした。

コレットはヴェントの視界から姿を消した。その刹那、ヴェントは体を捻り背後からの一撃を交わしながら裏拳を飛ばす。

難なく受け流される、止まることなく肘を捻りコレットの顔面に右の拳を叩き込む。コレットは体をのけぞりながら、それを避けつつ右足は床を蹴りヴェントの股間に吸い込まれるように跳ね上がる。両手がかちりと固めそのまま体重をかけ逆関節に砕こうとするヴェントの側頭部にコレットの左足が強襲、予測済みのヴェントは軽くスウエーしてかわし再びコレットの右足を砕こうと体重をかけようとしたヴェントの体が吹き飛んだ。

躲したとばかり思っていた左足がそのまま返ってきたのだ。

ゆっくりと立ち上がりながら、口元の血を手の甲で拭う。その瞳は冷ややかに燃えている。

「どうじゃ、じじいの蹴りもチコツと堪えたか？」

とうれしそうに笑う。相反して全く無表情のヴェント。

まさに陰と陽の戦い。

ヴェントの瞳がスーッと細まる、なぜか部屋の気温が下がったように肌寒さを感じる。

「ほーっ、真剣になってしもうたかの、年寄り相手に・・・大人げないの」

相変わらず余裕を見せるコレットではあるが、額から流れる汗が老人の体力の消失を証明していた。

締め切られた密室の中、二人の間にフワリと微風が漂った。コレットの目前からヴェントの姿が消えた。コレットは動かない。ヴェントの体が弾かれたように、コレットの側面から超低空飛行で飛んできく。コレットの左の蹴りが顔面に向かって放たれ、それを左手をついて急ブレーキをかけ間一髪でよけながら、ヴェントの体は宙を舞うようにオバーヘッドキックの要領で右足がしなりながらコレットの後頭部に襲い掛かる。

コレットは背後に目があるかのように体を捻り間一髪よけた。

二人は再び5メートルの間合いを持って対峙する。

その時、ヴェントは何か違和感を感じた。しかし、それはほんの一瞬だった。勘違いだと思った。次の瞬間、それは勘違いではないと思知らされた。

ヴェントの耳もとで声がした、その声が何を言っているのか分からないままヴェントの視界は闇に包まれた。最後にヴェントの瞳に

は怪しい笑みを見せたコレットであった。

葉風

もうすぐ春が来ようかというパリの街、長く暗いイメージの冬も終わり、明るい日差しが街を照らし何か心を弾ませる。

そんな一日の始まり、リシエールはカーテンの隙間から注す朝の陽光に目を細めながらベッドからはい出した。

勢いよく蛇口から水が流れ出し、あつという間に洗面器を満たす。リシエールは長い髪をかき上げ一気に顔を沈めた。

頭の中を漂っていた霧がスーッと晴れてゆく気がする。

今日もいつもの通り焼きたてのトーストに、手作りのブルーベリージャムをたっぷりつけてかぶりつく、口元にジャムがつくのもおかまいなく、パクパクと一気に食べつくす。仕上げは、プロテイン入りの牛乳を大きなカフェオレカップに一杯、一気飲み。

十分後、リシエールはアパートメントの扉を元気よく開けて通りへ飛び出した。

真っ白のTシャツにスリムなブルージーンズに蚤の市で手に入れたブラウン系の革製のハーフコートを羽織って颯爽とパリの街を行く。

彼女を見つけた近所の人たちが親しみを込めて声をかける。

「今日は、大丈夫かい？」

「ちよつとやばい・・・」

そういうと、カツカツと石畳に足音を響かせてメトロ口に向かって走り出す。

これも毎日の日課のようなものだ。

誰もがリシエールの笑顔が大好きなのだ。いつもにこやかで明るいリシエールに街の人たちも元気づけられた。そんな彼女を、このあたりの人たちはよちよち歩きのころから知っているのだ。

そんな彼女の仕事はなんと、プロのモデルであった。まだまだ一流と呼ばれるには程遠いレベルの彼女ではあるが、仕事には恵まれ

ている。

今では、事務所での立場もそこそこになり、新人の教育係のようなことも任されている。今日はまた新人が来るらしい。厄介ごとが増えると嫌な気持ちと、どんな子が来るのか楽しみにしているのが半分半分、結構人の世話をするのが好きらしい。

メトロでクランダルツシュで降り、10分ほど歩いたところにリシエールの所属する事務所「マニフィック」があった。

今日もしエールは扉を開けると「おはようございます！」と元気よくあいさつする。

事務所内にリシエールの声が響く、すると奥の扉が半分ほど開いて細く白い手がニョキッと出てきて、おいでおいでと振られている。ここのオーナー社長カトリーヌである。若いころはトップモデルとして世界中を飛び回っていただけはある、現在50の舞台を超えているのにもかかわらず、美しさと変わらぬスタイルを維持している。

リシエールに言わせると「化け物」であるらしい。勿論、これは本人に伝えることは出来ようはずはない。

リシエールは元気よく「おはようござうます」と社長室に入つてゆく。

それを見ながら、事務員、マネージャー、ほかのモデルたちがため息をつく。彼女ぐらいのものである、なんの恐れもなくあの部屋へ平然と入っているのは、彼女がカトリーヌのお気に入りなのもあるがあの性格ではないとあは出来ない。ああいう性格だからカトリーヌのお気に入りになったともいえるのだが、何にしるカトリーヌは、社員、所属モデルたちの羨望の的であり、恐ろしい存在であった。リシエールは別にして。

社長室はすべてが白でモダンな機能重視なインテリアで統一されている。

部屋に入つてすぐにある、応接セットの真っ白のレザーソファに一人の女の子が座っていた。

その女の子を見てリシエールは驚いた。

そんな様子など気づかなかったのか、カトリーヌはリシエールに紹介する。

「今日からこのマニフィックに所属する初の日本人モデルのサユキよ。」

驚きの表情のまま「私はリシエール、よろしくね!」と右手を差し出した。その時にはいつもの笑顔でサユキを見つめている。

「サユキです。まだフランス語がうまく話すことができません、よろしく願います。」

緊張している様子で、なれないたどたどしいフランス語でそう言っつて、リシエールの右手をしっかりと握り返してくる。

その力強さに、リシエールはサユキの内面的な強さを感じた。

真つ白の一人掛けのソファアーにゆったりと座ったカトリーヌが足を優雅に組み替えながら言う。

「リシエール、あなたが驚くのも無理はないわ、彼女は私の昔からの知り合いに頼まれて預かることになったの、私もちょうど今までは違ったモデルを探していたところで、以心伝心で急に話が決まっちゃって・・・」

以心伝心?? 相変わらずだな・・・

「そういうことで、何かと大変でしょうけどよろしくーお願いね」
尊敬するカトリーヌにお願いされると、

「わかりました、おまかせください」

としか、言えないリシエールであった。

そして、心の中では「よほど私は日本人と縁があるんだわ」と一人納得していた。

至輕風

フランス、パリ、カンタン広場のはずれにあるレストラン・フォンテーヌ」夜になり一気に活気づいていた。50席ほどの店内は客で埋まり、メートル・ド・テルのベールが忙しく立ち振る舞い、若いギャルソンたちに矢継ぎ早に支持を繰り出す。

店内の装飾は凝ったものでもなく、新しく美しいものでもない。それは昔からそこにある心の落ち着くものであった。

楽しい客席の裏側である厨房では、一人の日本人男性がコンピューター制御のコマのように、あつちでクルクルこつちでクルクル回っている。その周りを若いフランス人コックが汗だくになりながら走り回る。

デシャップのこちら側では、鼻の下に立派なヒゲを生やしたオーナーシェフのクルベルがいつもの赤ワインのバドワ割を片手にオーダーを読み上げている。

クルベルはデシャップからこつち側でオーダーを読み上げ、盛り付けの手伝いをするだけで厨房の中に入ろうとしない。

でっぷりと太った彼が厨房に入ってしまうと窮屈で、若い二人が素早く移動することができず戦力が半減してしまうためこのようなスタイルになってしまったのだ。

「ウラーラー、シヨウ！また新しい客が入ったぞ。」

クルベルはそう言って新たにオーダーを読み上げる。

シヨウと呼ばれた日本人はまだ働かせる気かとはかりにクルベルを睨み付けるが、それどころではないオーダーが山積みである。すぐさま再び動き始める。

それに伴い、見習のフェネガンも目を白黒させながら走り回る。

クルベルも少しでも手伝おうと、デシャップに皿を並べ始める。そこに出来上がった料理が容赦なく置かれてゆく。おいしそうに焼きあがった仔羊の骨付き肉のロースト、香ばしい香りを放つラン

グステイーンの香草焼き、ペルドローのパイ包み焼きとシヨウが立
て続けに仕上げると、それに負けじとフェネガンも、ポナム・ムー
スリーヌ、ドフィノワーズ、ブロッコリーのフラン、インゲン豆の
ベーコン炒め、クルジエツトとトマトのグラタンなどの付け合せ仕
上げては、クルベールのもとへと持つてくる。

しかし、クルベールもこの道のプロである、彼ら2人ほどのスピ
ードがあるようには見えないのに、彼らに負けるでもなく、手際よ
く盛り付けてゆく。

そのタイミングに合わせるようにシヨウが、デイジョン風ソース、
アメリカンソース、赤ワインソースと仕上げては、それぞれの料理
にソースをかけ仕上げてゆく。

嵐のような時間がしばらく続き、ようやくシヨウが最後のお客さ
んのデザートにミントをチョココンと盛り付けた。

「ご苦労さん」

クルベールがギャルソンに最後の皿をわたしながらそう言って、
赤ワインのバドワ割をグピツと飲み干す。

朝から晩まで、毎日飲んでいたのでクルベールの頬は赤く焼けて
いた。

今日も上々の客入りにクルベールはご満悦である。

シヨウがこのレストランにひよっこりやってきてから2か月、彼
に厨房を任せるようになってからは
客の入りはうなぎ上りであった。

初めは何かと疑わしいシヨウであったが、いまではクルベールの
絶大な信頼を得ていた。とは言っても、それは仕事面でのことであ
って、プライベートでのシヨウにはいまだわからない彼の正体のこ
ともあり、まだ不信任を拭うことができずにいる。

2か月ほど前の事である。

あの日のシヨウは、高級なスーツに革のロングコートを着た、セ

レブな日本人ビジネスマンのようであった。フランスでは珍しくない人種である。

そのような客が、今までめったに来なかったため、支配人であるベアールはまず不審に思った。それに彼が店にやってきたのが、開店の1時間以上も前だったのだ。

もちろんそのころはまだ開店の準備中、一旦断ろうとしているところにやってきたのが、クルベールの一人娘のリシエールだった。

彼女はなぜかシヨウに興味を持ったらしく、

「いいじゃない、邪魔になって仕方がないわけでもないでしょ、

彼の相手は私がするから」

そう言つて、さつさとバーカウンターに向かってしまった。

「何か飲む？」

そう言つと、彼女はカウンターの中に入り手慣れた手つきで準備をする。

シヨウは厨房の中が気になるのか、しきりに外から見える厨房の一部分を覗いていた。

そんな様子を見ていたりシエールはシヨウにますます興味を持った。彼が日本人らしいというのもその理由であったが、シヨウには何か不思議めいたものがあつたのだ。

「何かきになることでもあるんですか」

そう言つと。

「いえ、なんでもありません」

妙に落ち着いた雰囲気を持つシヨウに、リシエールはその時あまり不信感をもつてはいなかったのだが、接客のプロであるベアールの目には何かと気にかかつていた。

コートもスーツもビジネスマンが身に着けるにはあまりに高価で、その割にオーダーメイドではないし、長時間座り続けたためにズボンに深いしわが寄っている。それに英語よりもフランス語の方が流暢に話せるようだ。

しかし、こんなことは大した問題ではないし、なんら危険性のな

いおとなしい男に見えたので気にするのをやめてしまった。

それからは、ベアールは開店準備などに忙しく、リシエールに男を任せきりにしていた。

その間にリシエールはシヨウウからいろいろなことを聞き、彼が自分の名前も思い出せない記憶喪失になっていることを知り、父に紹介してここで働くこととなったのだ。

そして、ただ一つ分かったことはシヨウウはもともとコックとして働いていて、それもなかなかの凄腕であるということである。

それはたった1か月ばかりで、クルベールの信頼を得て、このレストランの切り盛りをやりこなし、わずかな時間で集客を30パーセントアップさせたという事実で分かるものである。

シヨウウはあの日以来店の2階の物置部屋にしていた、昔のクルベールの住居を整理して住んでいる。

クルベールは知り合いに連絡を取り、いろいろと日本人のコックの情報を集めてみたが、シヨウウに当てはまるような有力な情報を得ることは未だにできていない。

領事館に掛け合うことも考えては見たが、不法労働の問題などがあるため未だに踏ん切りがつかず困っているところである。

それにしても、クルベールがシヨウウを気に入ってしまい手放したくない様子を見せているのが、ベアールにとって少々気がかりであった。

ちなみに、シヨウウという名はリシエールが付けた。

なぜシヨウウと言う名を選んだのかとクルベールが尋ねたら、ただなんとなく、という返事が返ってきた。

朝風

暗い、何も見えない、何も聞こえない、何にもない。そこにあるのはただ自分という得体のしれない物体、ただそれひとつ。

背中が震えているのが分かる。暗闇に対する恐怖なのか、何もわからない自分の過去、これからどうすれば良いのか分からない焦燥感、何が根源であるのかはわからない。ただ漠然と理解できているのは、それがすべてであるということ、そのすべてが自分を締め付け苦しめる。

ふと気づくと、ベッドに腰掛けている自分に気づく。暗闇の中自分の手の平を見つめている。

今まで瞳を閉じていただけなのだろうか、それとも夢を見ていただけなのだろうか、と考えてみるが、どうでもいいことだと思いつく。これもまた夢なのだから。毎日のようにおこり、毎回同じ終わり方となる。分かっていることだ…。

ジツと自分の手の平を見つめていると、暗闇に白い手の平が浮かび闇の世界で唯一の存在となっていた。それを自分はジツと見つめている。吸い込まれるように見つめている。

すると指名手の平にポツンと一つの黒い点が浮かんだ、気のせいかと思った。ジツと見つめているとそれは、歪み、擦じれる様にな大きくなっていった。暗闇の中の白い手の平、そのなにで新たに闇が蠢いている。

なぜ闇が蠢いているのか・・・蠢いているように見えるだけなのだ。

私は泣いていた。涙を流していた。その涙が頬を伝い顎の先から自分の手の平へと落ちて闇が生まれていたのだ。

私は泣いていた。黒い涙を流していた。何も不思議に思わない、それを不思議だと思わない自分の事も不思議に思わない、ただすべてをあるがままに受け入れている。

やがて闇は広がり、大きくなり、唯一の白い手の平を黒く染めて溢れた。流れ落ちた。溢れた。流れ落ちた。

それはスピードを上げて加速した。止まらない…止まらない、闇に染まる、染まる、時が流れる、流れる、加速する。

どれほど時が過ぎたのだろう。自分が揺られているのに気づく。正確には海原に浮かんでいた。

見たわけでも確認したわけでもないが、確信していた。

それは血であった。血の海に浮かんでいた。生暖かい、ぬるぬるとした洗っても、何をしても拭い去ることのできない穢れた血。

蠢く暗闇の空が瞳に映る。ただ揺られている。

動く気がないからオールなどなかった。どこに行くあてもないから舵さえもない。そして、自分を守る意思さえもないからボートまでなくなってしまった。

ふと、沈む?…そう思った…そして、沈んだ、沈み始めた。初めて楽になれるのだと思った。

不思議と苦しくはなかった、このまま海底に体を横たえ果てていくのだと思った。

ただそれだけのはずであったのに、心が動いた、ほんの少し、そよ風のように。

海面に微かな波風が立つ、それは風となり吹き上げる。

何かあるはずだ、方法が、手段が、助かりたい、そう思った。

そう思った瞬間にドツと苦しみが押し寄せる。死よりもつらい苦しみである。

ねっとりとしたものが、口から、鼻から、耳から、目から流れ込む。

のどが焼ける、吐き出そうともできず押し込まれる、流れ込む。

耳から、目から、鼻から、頭の中がはちきれんばかりに詰め込まれ、流れ込み蠢き、かき乱し、砕き割る…苦しい苦しい、死にた

くない、抜け出したい、足?いた、もがいた、暴れた、苦しんだ。のたうちまわる。

自分で分かった、自分の命の蠟燭の炎が消えかかるのを、必死で最後の力を振り絞り右手を伸ばした。ちぎれんばかりに伸ばしたその手に何かをつかんだ。ほんの小さな何かをつかんだのだ。握りしめるきつく握りしめる。

沈んでいく、沈んでいく、意識が薄れていく。薄れていく意識の中で、その手に握られた小さな一粒を見ようとした。

目の前に光が溢れた。

朝だった。

もう少しのところで目が覚めてしまったのだ。

朝日のまぶしい光が目注す様で頭が痛む。

汗だくになってしまっていた。パジャマ代わりのＴシャツを脱ぎ、シャワーを浴びる。氷が解ける様に頭痛の種が洗い落とされ、目が覚める。

シャワーを終え、時計を見ると仕事までまだ十分に時間があった。

少し遅めの朝食を取りに、今日はコートをひっかけて外へ出かけることにした。

朝の少し冷たい風が心地よかった。

合ったかなカフェオレ、サクサクのクロワッサンにパン・オウ・シヨコラ、そんな簡単な朝食がシヨウにはごちそうであった。

目の前にカフェオレが来て、さあ朝食を食べようとクロワッサンに手を伸ばしたとき、外に並べられたテーブルから窓越しに誰かが手を振っているのに気づく。

クルベールの娘のリシエールであった。シヨウの名付け親である、あくまでも仮の名前ではあるが。

ギャルソンにことわり、カフェオレとパン籠を持って店の外に出る、リシエールがまだ手を振っている。

「おはよう」

いつもの元気のよいリシエールのあいさつである。

「おはよう」

思わず笑顔になってしまう。

「今日は珍しいわね、こんなところで会うなんて、今日は観光案内人なの。そうそう、彼女を紹介しないとね」

さつきから気にはなっていたが、リシエールの隣に美しい黒髪の日本人女性が座っていたのだ。

「サユキ、紹介するわ。彼が私のパパのレストランで働いているシヨウ、一流のキュイジニエよ。」

早口で言うリシエールに、とまどいながらもなんとか理解できたらしい。

「彼女はサユキ、ついこの間日本から来たばかりの新人のモデル。うちの期待のホープね」

「はじめまして、サユキです。まだこの町にも、フランス語にも慣れていないのでいろいろ教えてくださいね」

にっこりと笑う。リシエールの笑顔が元気にするものであれば、サユキの笑顔は心を癒してくれるものであった。

記憶を失ってから初めて会う日本人だからなのか、妙に親近感が湧いてしまった。

「僕もこの街の事はまだあまりわからないんだけど、フランス語なら少しは力になれるかもしれませんね」

思わず日本語で話していた。

「ありがとう」

そう言うてにっこりと笑うサユキの横で、ふくれっ面のリシエールがいた。

「どうしたの？」

「なんて言ったのか分からないわ、急に日本語で話し始めちゃうから・・・」

一人仲間外れのようになり、ご機嫌斜めのような。

「ごめん、これからは気を付けるよ。彼女にフランス語ぐらいな

ら教えてあげれるよって言ったんだ。」

「ふーん、そうなの。サユキにフランス語教えるのなら、私には日本語を教えてくれない」

「いいよ、喜んで」

そう言つと、リシエールの機嫌が直り、にこやかになった。

そんなリシエールを見て、サユキもホツとした。リシエールの機嫌を損ねたのかと心配していたのだ。

「じゃあそろそろ仕事の時間なんで、僕は行くよ」

そう言つて席を立つと。

「私たちも行こうか、」

「サユキにバリ街を案内するの」

「それじゃあ、楽しんできてね」

手を振りながら二人と別れ、シヨウは仕事へと向かった。

黒南風

ドバー海峡に浮かぶ小さな島、長い間誰一人として近づくことなく誰もが無人島だと思っていた島に、闇の中を一機のヘリコプターが降りたつた。

ヘリコプターが生み出す風に生え茂った草がなびく。その草を踏みつけて地上に降り立った男。真っ黒のスーツに、引き締まった肉体を覆い、きつちりと撫で上げられた黒髪は風になびくこともなく闇の中でもなお黒光りしている。

引き締まった体はさほど大きなものではない、せいぜい170センチ少しであろう。これは彼の家系によるものであるう、代々大柄な体は暗殺に不向きとされている。そんな一族の中では、彼は大柄な方に属するのだ。

伝説の族長であるコレットなどは身長160センチほどで、体つきもいたって普通で一見華奢にみえる、だからこそ敵の目を欺くことができたのだろう。

しかし、その伝説も先日終わりを告げてしまった。コレットが死んでしまったのである。正確には、何者かに殺されたのだ。彼は、長年使いなれた椅子に座ったまま、胸に一本のナイフを突き立てて息を引き取っていた。

犯人が何者なのか？その一本のナイフのみが手掛かりである。

犯人の目撃者は一人としていない、なぜならこの城には全く警備とか防犯と呼ばれる装置が存在しない。それどころか、部屋だけではなくどこにも鍵が存在しないのだ。これは、代々プリスカ一族の族長は最強であり、だれからの挑戦も断れないという決まりがあるからである。

族長は最強であれば誰でもよい。族長になりたければ族長を倒せば良い、これがプリスカ一族で受け継がれる血の掟なのである。

しかし、一族がこの稼業を始めて以来、こういった形で世代が交代したことはなかった。誰も挑戦しなかったわけではない、だれが挑戦してもダメだったのである。

それは、血縁ーストレイン、の成す奇跡のようなものである。サラブレットの子はやはりサラブレットなのである。

その男の名は、アルベルト・プリスカ。若きプリスカ一族の後継者である、いや後継者候補になってしまったのだ。

予定では、近々コレットは引退し、アルベルトに族長の座を譲るはずであったのだが、コレットの死とともに、コレットの命ともう一つ消えたものがあつた。「漆黒のリング」である。

これは代々族長のみが身に着けることができるものであり、世代交代する時には欠かすことかすできないものである。

今現在、プリスカ一族の族長は先の族長であるコレットを殺害し、「漆黒のリング」を持って姿を消した者なのである。しかし、族長となるべき人物がなくなってしまった。

考えられることは一つ、これは他の組織からの挑戦状なのではないかということである。

結論がそうなった以上アルベルトは容赦しない。

まずは唯一の証拠の品であるナイフであるが、これはそれほど手のかかることでなかった。

このナイフは今までに、2度使われていた。どちらの場合も、世界的企業であるサヴァランが関係していた。

一族の調べでは、サヴァラン社は闇の軍需産業にも触手を伸ばし始めたようで、その計画に邪魔なものを「ノアール」と呼ばれる、サヴァラン社の裏組織によって消しているようである。その組織に属する新手の暗殺者、コードネーム・ヴェントである。

十中八九、ヴェントがこの件の犯人に間違いないようである。

しかし、アルベルトには俄かに信じられなかった。それは、あまりにもコレットが強すぎたためである。いまだにコレットが殺されたなど信じられなかった。

彼の右手には犯行に使われた一本のナイフが握られていた。

「自由」「平等」「博愛」の3つの言葉が刻まれている。

それを見て、馬鹿にしている、ときつく握りしめる。フランス国旗になぞらえた言葉である。

アルベルトが組織全体にヴェントの搜索と殺害の命令を出したと同時に一つの情報がもたらされた。

敵対する組織である「ノアール」もまたヴェントを血眼になって探しているらしいのだ。

「ノアール」に対する直接攻撃を一旦差し止めたアルベルトは、ひとり夕暮れの火の光が射す執務室で考え込む。

夕日はいつものように、大西洋へと沈んでゆく。

軽風

吹き抜ける春風の中、シヨウは一人セー又川のほとりを歩いている。彼の手には小さな紙袋が一つ握られていた。

お気に入りのブルーランジェリーで買ったパンとコーヒーが入っている。

彼は、ぶらぶらと歩きながら朝食をとるにふさわしい場所を探していた。

あのベンチでセー又川を眺めながら朝食をとろうかと思っていたら、ジャケットの内ポケットの携帯電話が音と共に振動する。

「もしもし」

「やっぱり、シヨウさんですね」

と明るい聞きなれた声がある。しかし、その声は不思議なことに両耳から聞こえてくるのだ。

「サユキです。ちょっと振り返ってもらえますか。」

言われたとおりに振り返り見上げると、そこに満面の笑顔の彼女がいた。

「今日は、ひさびさのオフで何しようかとぶらぶらしてたんです。」

「仕事は忙しいの？」

「社長が、率先してプッシュしてくれるので、結構忙しくしてますね。」

などと話しながら、二人でクロワッサンを頼張る。

「シヨウさんは、今日は・・・」

「ああ、僕もオフだから、ぶらぶらと市場でものぞいて時間を潰そうかなと思ってね」

「ご一緒させてもらってかまわない？」

かわいい笑顔で言われると、断りようがない。また、断る理由もな

いわけだが。

朝の市場は人が賑わい、活気に満ち溢れている。

新鮮な果物、野菜、海産物、キノコ、チーズ、ハムやベーコン、様々な肉が並んでいる。

二人は、ひとはごみを縫うように立ち並ぶ露店を隅々まで見て回る。サユキは、わからないこと何から何までシヨウに質問し、シヨウは嫌な顔一つせずに親切に説明している。

はたから見ると恋人同士に見えるのだが、会話を聞いているとまるで親子のようであった。

二人は一緒にランチを食べ、パリの街を観光よろしく、とばかりに歩き回った。

エッフェル塔に登り、チュイリニー公園を散歩して、そのままサユキの買い物に付き合うこととなり、楽しい時間はあっという間に過ぎ、夕闇が空を覆い始めていた。

夕食をおごるほどお金を持っていないシヨウは、サユキを彼女の住むアパートメントのまえまでおくって行った。

そして、その数日後、彼女は姿を消した。

夕東風

真っ白に統一されたその建物は、あまりにも無機質で何の感情もあらわさない要塞のようにそこに存在していた。

その建物の中も、殺風景であり機能ばかりを尊重した結果こうなつた、という見本のように思えた。

イブ・ジュリーは案内された部屋の前にたどり着いたが、なかなかノックする勇気がでず躊躇していた。

昔の仲間から、その事件のことを聞かされたのはつい2日ほど前のことであつた。イブはなせもつと早く知らせてくれなかつたのかと、仲間を責めた。

その事件は1週間も前のことであつた。

しかしながら、彼はすでに軍から籍を抜いている身分である、機密条項が関係している以上やすやすと情報を流すことができなかつたのは、彼もまた軍人として籍をおいていただけによく分かつていた。

しかし、あいつはそんなことは何も言わず、「すまなかつた」としか言わなかつた。

そんなことを思い出しながら、なお扉の前で立ちすくんでいた。何が原因でそんなことがあつたのかは、機密事項がかかわるので詳しくは知らされてはいない、しかしその結果、イブが尊敬してやまない少佐の身にどのようなことが起こつたのかは知らされていない。

その説明を締めくくつた言葉が頭をよぎる。

「生きていること自体が奇跡」

うなだれながら、弱弱しくノックをする。

返事はない。

心の内底では、検査でも何でもいいから部屋にいないのではないか、そうあってくれればいいのに……と見舞いにきた者として

は本末転倒なことを思っていた。

ゆっくりと扉を開く。

カーテンが引かれ、窓際に置かれたベッドはここからは見ることができなかった。

無言のまま窓に向かってゆっくりと進む。

ベッドに横たわるその姿を見たイブではあるが、それが何者なのか、そしてその状態を一目では理解することができなかった。

布団からのぞくすべてが包帯に覆われ、ただ二つの瞳だけがのぞいている。

そのその瞳は、微動だにせず自分のことを見つめている。そして、その懐かしい瞳から涙が溢れそうになっている。

涙をこらえながら瞳をさまよわず、当時あこがれていた少佐の姿はそこにはなかった。

軽々と重機関銃を操っていた左腕は肘から先はなく、190センチ近くあったその体では狭苦しいはずのベッドだが、布団のふくらはみは膝から下にはなかった。

趣味の悪い冗談だと笑い飛ばせばどんなに気が楽だっただろう。しかし、現実には想像以上に非情で避けることを許してくれなかった。

握りしめた拳の内側で詰めが掌に突き刺さる、そんな痛みさえ感じないくらいの怒りと悲しみが怒涛のごとく心の中になだれ込んでくる。

うつむき涙をこらえながらなんとか発した言葉は、「少佐」の一言だけで何も言うことができなかった。

それ以上口を開くと、涙をこらえることができなかった。

そのイブ・ジュリーの乗った車、その向こうにそびえるビル、サヴァランの本社である。

ガラス張りのそのビルが夕日の赤に染まる。

燃えているようにも、血に塗られたようにも見える。

今日も一日人の出入りを見続けていた疲れた目頭を強く指で押さえる。

左手につけられた腕時計で時間を確認すると、エンジンをかけ走り去る。

10分後、その車はすすけたバーの前に無造作に停められていた。狭いカウンターの隅でコニヤツクのロツクを飲むイブの隣にその男が現れたのは、イブが2敗目のロツクを飲み干した時だった。

その男はビールをイブはもう一杯ロツクをたのんだ。

男はミックと呼ばれていた、本当の名前は誰も知らない。

ただ、金さえ払えばどんな情報もどこからかひっばってくる、そんな仕事をこの男は長い間生業として生活することができている。

それだけで、この男の情報の確かさがわかるというものである。そうでなければ、とつくの昔にセーヌの川底で川魚たちのえさとなっていたことであろう。

ミックはビールを一気に飲み干すと、カウンターに真つ白な封筒を置き、その上に左手を手のひらを上にして重ねた。

イブはゆっくりとロツクを飲み干すと、くたびれたジャケットのポケットからジャケットとおそろいのようなしわくちゃなユーロ札を引っ張り出して、その手の平にのせた。

ミックは手のひらにのせられた札を見て、右手の指をパチンと2回鳴らした。

イブは苦々しげに、再び札を2枚その上に重ねた。

ミックは札を握りしめ、無造作にポケットにねじ込むと、左手をチヨキにしてイブの前でちらつかせる。

イブは横目でミックをにらみながら、タバコを挟んでやりライターの火を差し出す。

ミックは旨そうに紫煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出すとおもむ

るに立ち上がり去ってゆく。

閉まりゆく扉の陰から、タバコがはさまれた左手が振られて、そして扉は閉じた。

それを見届けると、イブは封筒から一枚の写真を取り出した。

その写真にイブの目が釘付けになる。

「なぜやつがここにいる？」

つぶやいた声は、店内の喧騒にかき消された。

それは、イブがミックの生きた姿を見た最後の日であった。

少女風

パリの街のだ真ん中を貫くように流れるセーヌ川、そのほとりにぼんやりとたたずむ小さな影が一つ。

悲しみと自分の非力さに打ち負かされて背を丸め、ぼんやりと滔々と流れるセーヌの流れに自らの瞳を映し出してみろ。

はち切れんばかりの思いが頭の中、体中を駆け巡り、若いリシエールの心を破裂させんばかりである。

知らず知らずのうちにリシエールの頬は涙に濡れていた。

「いつからなんだろう」

自分に自分で問いかける。

初めて会った時のことを思い浮かべる。すでにあの時から彼に興味を持っていたことは、分かっていた。本当に好きになったのは・

いつも強気で自信にあふれ、誰からも頼りにされる本来のリシエールの姿はそこにはなかった。

美しいまでも儂く脆い、乙女の心を持った少女のような女性がそこにいた。

まだ肌寒い風が、リシエールの体をさらに縮こまらせ、余計に惨めな気持ちにさせる。

リシエールが自分の本当に気持ちに気づいたのは、つい最近のことである。

サユキが現れてシヨウと仲良くなるにつれて、イラつく自分に気づき、なぜなのか不思議に思っていた。

それが恋だとは、思っていなかった。

今までもいろいろ恋をしてきたつもりだったが、いつも自分から積極的にアタックしていくリシエールが初めて感じた感情であった。そしてサユキが突然姿を消し、それを知ったシヨウの表情を見て、その日からのシヨウの力ない日々の生活を見て、心から締め付けら

れるように痛くて辛かった。

そして、はつきりと分かったのだ。

自分の正直な気持ちに。

一片の曇りもない私の気持ちは、シヨウだけに注がれている。

「私はシヨウを愛している」と。

愛している人が、苦しみ悩んでいるのを見ているだけは辛い、自分の無力さに気が狂いそうになる。

そのうえ、彼をそのようにさせたのが、自分の後輩であり友人であつた事が、さらにリシエールを苦しめた。

リシエールもサユキのことが好きだつた。心の美しい素直な子供のような心を持つ女の子であつた。

サユキとシヨウが付き合うのであれば、私は手放しで喜べる、祝福できると思つていたはずなのに……。

頬を濡らした涙が、ポツリポツリと石畳に落ちてはにじむ。

小さく丸まつたりシエールの体を覆うように、大きな影が伸びる。

男は黙つたまま立ち尽くす。

リシエールの父親であるクルベールである。

愛する娘が心傷つき泣いているのを見るのは居た堪れない。

しかし、男である彼は何と言つてやればいいのか全くわからず、

ただ震える小さな背中を見つめている。

ため息を一つついて、空を見上げると青白く暗い空に星々たちが煌めいているのが見える。

「こんな時、どうすればいいんだ！おい！」

星に向かって大声で叫びたかつた。

グツと拳を握ると、一步踏み出して優しく娘の肩を抱いた。

リシエールの体が、ビクツと反応するが、すぐに父親だと知つて体の力が抜けた。

クルベールは優しく語りかけた。

「もう泣くな……俺まで辛くなる。なあ、リシエール、こんな時に泣いてばかりいてどうするんだ、お前らしくもない。お前までそ

んなことじゃ、ヤツはもつと落ちて行つてしまつぞ」

クルベールはリシエールの隣に座りこむ。

「よくお前の母さんが言つていたよ、女は鉄だつてね……。叩かれて叩かれて強くなるんだ。そして、研がれて磨かれて剣となる。そんな女の心が、女のたつた一つの武器となるんだつて」

二人は並んでセーヌを眺めている。二人の視線が交わることなく時間は流れる。

「私も、母さんのように強い剣を持てるかな」

涙を拭いながらリシエールが言った。

「ああ、リシエールはクラウドの娘だからな、強くなれるよ！それに俺の血も引き継いでいるんだ。間違いないよ」

リシエールは黙つてうなづいた。

セーヌの川面に街明かりが揺れる。

パリの街にゆっくりと春の時が流れ込んでいた。

潮追風

プリスカ一族の新しき長とならんとする、アルベルト、彼は今人生の中で最も過酷な時期の真ただ中にいる。

自分の祖父である先代の長であるコレットが新興組織である「モール」の何者かによって暗殺された。

その何者かが残した一本のナイフに刻まれた3つの言葉、「自由」「平等」「博愛」

その一本のナイフから浮かび上がる、人の李暗殺者「ヴェント」しかし、そのヴェントの情報があまりにもなさすぎる。唯一の物が、アジア系人種という一行の情報のみである。

今まで暗殺という闇の生業をなしてきたアルベルトであったが、分かっているだけで20人以上もの要人の暗殺を行い、残したのが一本のナイフとアジア系の人種だけの情報とは、暗殺者としてほぼパーフェクトとってよいものである。

そして、また一本のナイフを残された事件では、報復を行おうとしたその組織は、例外なく消し去られてしまっている。それもたった一人の男の手によって。

これほどの戦慄を覚えたのは先代となってしまったコレット以来である。

これまで語られてきたコレットの実績は、驚愕に値するものであり、それを受け継げるものなどない。ゆえにコレットはプリスカの長き歴史の中で最も輝き続ける存在であった。

昔のように暗殺者の力量だけで長になりうるのであれば、アルベルトは頂点に立つことはなかったであろう。そんなアルベルトに時代が味方した。

彼が先代のコレットの補佐という形で指揮を執り始めてからは、ただの暗殺からスパイ工作、ボディガード、またいくつもの会社を設立し、表立った活動も行い、行き詰った一族の立て直しに成功

して今後の憂いをすべて排除してしまった。

彼の能力の高さに、彼が次期長になることに誰も異を唱えることはないであろう。

しかし、そんなアルベルトに暗雲をもたらしたヴェント。

今のアルベルトがあるのは、コレットが長老たちを抑えすべてを任してくれたことによるのは間違いない。そんなこともあり、アルベルトのヴェントへの憎しみは計り知れないものがある。

アルベルトには、コレットとの孫と祖父という関係での思い出はほとんどない。

それも、彼が幼少のころ祖父と共に時を過ごしていなかったためである。

アルベルトは6歳になるまで、父に連れられて一般の世で育てられていたのである。

昔のことであるし、誰も口には出さないものでそうなった経緯など真実は解からないのではあるが、父は何等かの事情でプリス力をさつたのだ。

そして、6歳の誕生日の日にコレットの手によって連れ戻されてその日より長となるための修行の毎日である。

現場に出ると長の孫というステータスなど全くない、その事実を上層の長老たちの身が知るのみでアルベルト自身も知らなかったのである。

その事実を、彼が18歳になり一人前と認められた時であった。

それより、彼は自身の希望により大学に進学し経営学を学んだ。

あれから15年の月日が過ぎ、アルベルトはプリス力の長の居城にいる。

窓から眺める海原は陽光に輝き、その海原の上を漂うように白いカモメたちが飛んでいる。それは一枚の絵画のように人に目を引き付ける景色である。

しかし、彼の眼にはそんな素晴らしい景色さえ映ってはいない、今アルベルトの頭にあるのはヴェントただ一人、ヤツをどうにかし

ないといけないのである。

もちろんそれは、アルベルト自身の手によってでなければならぬのだ。そこで初めてアルベルトはプリスカの長として認められるのだ。

確かにアルベルトはすでに実権を握っているといえないことはないのだが、それは表の稼業のことであり、実際の稼業のほうは依然としてコレットの支配下にあったのだ。

どうやってヴェントを探し出すのか、彼の脳裏にはすでにある程度計画は立てられてはいる。が、しかし、それは大きなリスクも抱えている。そして時間はない。真に今、決断の時なのである。

苦渋に満ちた表情を浮かべる彼の顔、誰にも見せられるものでもなかった。

次の瞬間、いつもの涼やかな無表情のアルベルトに戻っていた。

彼が振り返ると、側近であるローランが立っていた。

2人の視線がぶつかり合う。

沈黙の時間が過ぎる。

「どうするべきかな？」

アルベルトは言った。

「初めてですね、あなたが私にそんな質問をするなんて」

初めてのことに喜びが生まれ、ローランの口元が緩む。

「聞くまでもなくもう決まっていますのでしょ」

考え込むアルベルト、だが彼の本心はローランの言うとおりすでに決まっている。そしてそれを最も理解しているのが、幼い時より技を磨きあつたローランである。

「アル（ローランだけアルベルトのことをそう呼ぶ）、俺がやる任せっておけ」

そう言うと、ローランは部屋から出て行ってしまった。

賽は振られた。

後はローランを信じるのみ。

アルベルトは一人窓の外の海原を眺めている。

シヨウの心は深く沈み込んでいた。心を許せると思っていたサユキが突然姿を消してしまい、何もかも信じられなくなってきていた。自分自身が何者なのか分からず、今にも心が崩壊しそうである。しかし、そんなシヨウの心を支えてくれたのはリシエールであった。

その日から気が付くといつも彼女がいた。いつものあの笑顔でシヨウのことを見ている。

しかし、心が傷つき精神で氣にまいってしまっているシヨウは、笑顔のリシエールの瞳の中に宿る悲しみに全く気付いていない。

彼女もまた傷つき、心を病んでいたのだ。

そんなリシエールを力づけたのは、父の言葉であり、シヨウに対する愛であった。

いつしか二人は互いに求め合い、抱き合う関係になっていた。

リシエールはシヨウに近づけば近づくほど、抱き合えば抱き合うほど、彼の心の中にいるサユキの存在に気づかずにはいられなかった。

ただ、リシエールはシヨウのすべてを愛することによって救われた。サユキの存在さえひっくりくるめてシヨウのすべてを愛したのだ。毒を食らわば皿まで、その言葉通りのことを彼女は行ったのだ。

そして今では何もかもを受け止め、今私は幸せなのだと思えるようになってきた。

そんな二人をクルベール以上に心を痛めてみている男、それがベールである。

ずっと独身を貫くこの男にとっては、リシエールは自分の娘、いやそれ以上の存在であった。

クルベールが訳あってクラウドと別れ、リシエールを男手ひとつで育てることになってからは、子育てと店の切り盛りをクルベール

とベアールは二人三脚でやってきた。

そんなベアールにリシエールは、クルベールに対する愛情と変わらぬ愛情を与えてくれた。

いつしかリシエールはベアールのことをベアールパパと呼ぶようになった。その時の喜びは今でも心の中で響き続けている。

そんな彼だから、リシエールの事をよく分かっていた。

彼女は幸せを感じ、それがいつまでも続くものだと思っていたのだ。だが、それはベアールの眼には、薄氷の上で一見楽しそうにまごごとをしている二人の子供にしか見えなかった。

そして、今の状況が長くなればなるほど、足元の氷が砕けたとき再び浮き上がることができないほどの深みに沈み込んでしまうことが怖かった。

この二人が結ばれることはない。

ベアールは本能的にも、いままでの経験上にも分かっていたのだ。しかし、クルベール同様にベアールもどうしようもなかった。

歴史が証明するようにどんな独裁者であろうと人の心まで操ることはできないのだ。

クルベールはもうなるようにしかならないだろう、と半ばあきらめているが、ベアールには気がかりなことがある。

シヨウの正体である。

今では従業員として申し分ない働きを見せているが、彼の素性は何一つ分かってはいないのだ。

何しろシヨウ自身が記憶を失い、自分自身が何者かわからないようではどうしようもないのだ。

ある日ベアールは決心して、リシエールに尋ねた。

「リシエール、シヨウが何者なのか気にならないのか？」

リシエールは、黙ってうつむいたままである。

知りたいのは解かっている、しかしそうすることで彼が自分の前から去ってしまうことを何よりも恐れたのだ。

そんなリシエールの気持ちは分かる以上、ベアールはこれ以上に

強いることはできなかった。

それから幾日もたたぬうちに思いもよらぬ所からベアールの提案が実現することとなったのだ。

それはシヨウの一言から始まった。

「僕は一体何者なんだろう」

彼は毎日のように見る夢にうなされて、汗まみれになって目覚めていた。そして、心に安らぎを与えてくれた唯一の存在であったサユキは姿を消してしまった。

誰が見ても、もうシヨウの精神は限界まで来ていた。そんなシヨウが今、何かにすがろうとするのなら、それは自分自身の他ならなかった。

自分が自分を何者かが分からないという、理不尽な現実がシヨウを苦しめているのである。

自分の正体さえわかれば、少なくともその苦しみからは解放されるのである。

しかし、それは新しい苦悩を抱え込むことになることになるかもしれない可能性を秘めている。

シヨウ自身もある程度は分かっていたではあるのだが、彼は何よりも今の状況を打破したい思いがすべてであった。

そんなシヨウの気持ちにリシエルは答えずにいらなかった。

彼女もまた現状に限界を感じていたのだ。

リシエルはシヨウから色々とか何とか思い出せる限りのことは聞きだしては、色々調べ、なんとか調べる価値のある場所を限定していった。

そして、一週間後二人はシヨウの過去を調べるための旅に出発することとなる。

パリはいつものように朝日を浴びてすがすがしい朝を迎えていた。シヨウとリシエールは、店の前で待ち合わせしていた。

今日から数日、何日になるかわからないがシヨウの記憶を探す旅になる。

リシエールにとっていいことなのか、悪いことなのかは今ではまだわからない。

しかし、誰もが彼女が何かしらの傷を負うことになるであろうと思っていた。

そして誰もが愛するリシエールが今のままずっと悩み苦しむ姿をみていたくなかったのだ。

それは父であるクルベールの思いであり、ベアールの望みであった。

今のままではリシエールはおるか、シヨウまでもダメになってしまふのである。

そして、もう一つクルベールには問題があったのだ。

今まではなんとか隠し通して来たのだが、記憶を失ったとはいえシヨウは現在不法労働者なのだ。

当局に発見されれば、シヨウは強制送還、クルベールも巨額の罰則金が課せられるのだ。

あらゆる面で、この旅は必要なものであった。

クルベールの愛車ルノーのハンドルを握るのはリシエールである。シヨウはもちろん免許など持っていない。

彼は、助手席に乗っている。

やわらかな日の光がフロントガラス越しに二人を照らし出す。

このところ暗く落ち込んでいたシヨウも、今日は少しばかり明るい表情をしている。やっと自分の行先が分かって気が落ち着いたのである。

そんなシヨウを見て少しばかりリシエールは気が楽になった。

実は昨夜はあまり寝ることができなかった。彼にどう接してこの旅を続けていくべきなのか、彼の記憶に何があるのか、悶々と考えているうちに朝方になり、疲れ果てて眠りについたのは外が明るくなり始めたころだったのだ。

シヨウに疲れた表情を見せて心配などさせたくない、リシエールはいつもの明るい笑顔で言った。

「おはよう、シヨウ、今朝は旅の出発にもってこいのすがすがしい朝だわ」

と声を弾ませた。

そんな彼女の明るさにつられて近頃見せなかったシヨウのはにかんだ笑顔を見せていた。

いつしか車は街中の雑踏を通り抜けて、のどかな緑の大地の中を走っていた。

広大なフランスの豊かな大地に伸びる一本の黒い道、その道の傍に車を止めて軽めのランチを取っていた。

あつたかなカフェオレにバゲットのサンドウィッチのカスケードを頬張りながら地図を広げていた。

大自然の中で食べれば、そんな日常的なものもごちそうであった。出発前にある程度決めていた予定ではあるが、このまままっすぐ東に向かうべきか少し北に進路を取るべきか話し合っていた。

「シヨウはどう思うの？」

バゲットにかぶりつくシヨウに言った。

口をモグモグさせながら、じっと地図を見る。特に何も考えている様子もないのにシヨウは迷うことなく一つの街を指差した。

それは有名なモンサンミッシェルから西に50キロほどにあるカナル、牡蠣で有名なこの街。

「どうしてここなの？」

不思議に思つて尋ねてみる。

「ん？ただなんとなく・・・それに有名なレストランがあるからね。」

今日はここに泊まらない」

全く気まぐれな答えにリシエールは少しあきれてしまった。

今でもそうであるが、仕事中のシヨウは動きもすばやく躍動的で引き締まった表情で仕事を叩き込むようにこなしていく。そんなシヨウに惚れてしまったリシエールなのだが、いったん仕事を離れてしまうと緊張の糸が切れてしまうのか、いつも何を考えているのか分からない表情でボーっとして、30分に一度はあくびをして眠そうにしている。

そんなギャップに最初は戸惑っていたのだが、今ではそんなシヨウがかわいいと思ってしまう。何か彼女の母性本能をくすぐるのであろう。

また、そんなシヨウを知っているのは私だけだという特別感も彼女の心を浮き立たせる。

確かにそこまで心を許しているのはリシエールだけだったのである。

パリの街の中では味わえない安らぎがここにはあった。

「そろそろ出発しようか」

そう言っただけでシヨウが立ち上がる。

予定よりかなりゆっくりしてしまっただよう。

そそくさと片づけをして二人は車に乗り込み走り出した。

緑の大地が陽の光をいっぱい浴びて光り輝いていた。

それからは、何度か休憩しながらも夕暮れ前までには何とか目的地であるカンカルの街につくことができた。

二人が今日泊まるオーベルジュは簡単に見つかった。

町の中心にある教会のすぐ西側にそれはあった。

とりあえず、チェックインを済まし部屋に入った。

清潔で簡素ではあるが、ゆったりとした造りでバルコニーがついていた。バルコニーに出るとそこからはよく手入れされた庭園が広がり、目を楽しませてくれる。

海からの風が、髪をなで潮の香りが鼻腔をくすぐる。

シヨウの思いつきできたこの街、ここに来てよかったと思った。食事までの時間、二人は街中へと出かけることにした。たそがれ時に、パリから遠く離れた小さな町の古びた街道をシヨウと歩いている。

初めての街を愛する人と散策するのがこんなにも楽しいことだったとは、人生最大の発見をした思いである。

夕日に照らされた教会が幻想的で映画のワンシーンのようであるため息が出る。

うっとりとしながら、シヨウの腕に抱きつく。

しかし、うっとりとした表情のリシエールとは裏腹にシヨウは厳しい表情をしていた。

「どうしたの？」

「いや、べつに・・・」

と答えるシヨウではあるが、どこか様子がおかしい。

「そろそろ食事の時間だ。帰ろうか」

夕日が沈み、闇に包まれキャンドルがともる。

緩やかな時の流れが二人を包み、ゆったりとした耳に心地よい音楽が流れ、二人はアペリティフをかたむける。

アミューズは鳥肝のパテが入った小さなショーソンであった。

ほのかにコニヤックの香りをまとったパテに、バターの香り豊かなサクサクのパイ生地がよく合う。

桃のリキュールのシャンパン割を飲みながらリシエールはにっこりと笑う。

シヨウもつられて笑みを浮かべる。

人のおいしいものを食べているとき、最高の笑顔を見せる。

至福の時を二人は楽しんだ。

オードブルはブルターニュ産のオマールと牡蠣のサラダ仕立て天然塩添え

魚料理はドーバー産舌平目とラングステイーヌのカネロニ仕立て
香草風味、ソースアルモニック

メインディッシュの、仔羊のロースト、ブリック包みトリュフの
香り、カリカリのゴマのクレープ添え

どれも素晴らしい出来栄で、何より地産地消、この土地の食材
が遺憾なく実力を発揮していた。

二人は、今までの思い出、初めて会った時のことなど語り合い、
おいしい時間を楽しんだ。

そして、フロマージュ、デザートとワゴンサービスで思い思いの
種類のを心行くまで楽しんだ。

「うーん、もう入らな〜い」

これまで暗く悩みこんでいたリシエールは何処へ行ってしまった
のか、と思えるぐらい透き通った笑顔で言う。

シヨウもまた、今朝までのシヨウが別人であったかのように明る
い表情を見せている。

リシエールはこの旅に来てよかったと思い、心の底からこの旅を
進めてくれたベアールと、笑顔で見送ってくれたクルベールに感謝
した。

食後の二人は、別室のリビングで食後のコーヒーを楽しんでいた。

ゆったりとした食事のその雰囲気と満腹感に一気に気がゆるみ、

今日一日の疲れがリシエールを襲う。

そんなリシエールを、シヨウは優しく抱きかかえ部屋へと連れて
ゆく。

すでにリシエールの意識はなくなりかけていた。

ゆっくりとベッドに体を横たえると、唇にシヨウの唇が重なるの
を感じた。

幸せな気持ちの中、眠りという闇の中に彼女の意識は落ちてしま
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1380x/>

風の中で

2011年11月29日01時00分発行